

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

スペイン語における否定、形容詞と連体修飾複文

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Spanish

喜多田 敏嵩、カテリネ・シフエンテス

Toshitaka Kitada, Katherine Cifuentes

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨:

本稿は、『語学研究所論集』第23号の統一テーマ「否定、形容詞、連体修飾複文」に関するスペイン語のデータ提供である。33の例文について、コロンビア出身のスペイン語母語話者であるシフエンテスと検討を行い、訳出から見られるスペイン語の言語的特徴に関する報告を行った。否定に関する検討では、スペイン語における否定は動詞の直前に否定辞 *no* を置くという単純な規則で成り立っているが、その作用域は、接続法などの日本語にはない形式を用いることで、より明確に表示可能であることを報告した。形容詞文に関する検討では、スペイン語における形容詞文が、形容詞の意味によって、2つの繫辞動詞を使い分ける点や、形容詞が比較に関する語形変化を基本的に持たない点を報告した。連体修飾複文に関する検討では、外の関係の連体修飾の生産性の低さや、主要部内在型関係節の不在から、スペイン語での連体構造の使用が日本語よりも制限的であることを報告した。

Abstract:

Esta monografía ofrece datos del español acerca del tema del presente tomo de *Journal of the Institute of Language Research*. En colaboración con Katherine Cifuentes, hispanohablante nativa de origen colombiano, hemos llevado a cabo un análisis de las 33 oraciones designadas. En cuanto a la negación, hemos señalado que la negación en español se realiza por medio de la simple colocación del adverbio *no* delante del verbo, pero que su alcance se marca de manera más obvia que en la lengua japonesa en virtud de elementos gramaticales como el subjuntivo. Con respecto a las oraciones adjetivales, hemos indicado que el español cuenta con dos verbos copulativos *ser/ estar*, por lo que hay que elegir uno u otro de acuerdo con el significado del adjetivo. También hemos apuntado que los adjetivos no poseen inflexión en el superlativo relativo. Por último, a través del análisis sobre las construcciones adnominales, hemos señalado que su uso es mucho más limitado en español que en japonés debido a la baja productividad de cláusulas aposicionales y a la ausencia de cláusulas relativas de núcleo interno.

キーワード: 否定、形容詞文、連体構造、証拠性

Keywords: negación, oración adjetival, construcción adnominal, evidencialidad

1. はじめに

本稿は、『語学研究所論集』本号のテーマに関するアンケートに対する、スペイン語の回答である。アンケートについては、コロンビア出身のスペイン語母語話者であるシフエンテスが例文をスペイン語に訳し、訳文を2人で検討したうえで喜多田が回答を文章化した。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

2. 否定・形容詞に関する回答 (例文 1-19)

例文 (1)-(19) は、否定文がどのような構文をとるか探ることがねらいとなっている。スペイン語における否定文は、動詞の直前に否定辞 **no** を置くという単純な規則で生成される¹。否定辞 **no** の位置は元の肯定文のタイプや、助動詞であるか否か、定形であるか否かによらず、常に動詞の直前であり、クリティックが挿入される場合を除き、**no** と動詞は隣接する必要がある (Zagona 2002: 194-195)。したがって、否定に関する例文の検討では、否定辞 **no** の位置に関する記述を簡潔なものにとどめ、否定に加えて記述すべきスペイン語に特有の事項に関する報告も盛り込む。

(1) これは私の本ではない。

Este no es mi libro.

Est-e	no	es	mi	libro.
this.PN-M.SG	NEG	be. IND.PRES.3SG	POSS.1SG	book

スペイン語における名詞述語文の否定は、主語の数・人称に合わせて活用させた繫辞動詞 **ser** の直前に否定辞 **no** を置くことで行う。

(2) この部屋には椅子がない。

(2)-1. No hay sillas en esta sala.

No	hay	silla-s	en	est-a	sala.
NEG	have.IND.PRES.3SG	chair-PL	in	this.DEM-F.SG	room

スペイン語の存在文は、「**hay**+名詞句」という形式をとる。**hay** は動詞 **haber**² の直説法現在 3 人称単数形であり、この形は後続する名詞句の数に関わらず不変であることが特徴である。これは、後続の名詞句が **hay** の主語ではなく直接目的語として機能するためである。そして、存在文を否定する場合は、名詞述語文の否定と同様、動詞の直前に否定辞 **no** を置く。この例文では焦点的情報を「椅子」が担っているが、シフエンテスによれば、(2)-2 のように前置詞句 **en esta sala** 「この部屋には」を文頭に置いても、少なくとも文面では意味の差異は感じられない。

(2)-2. En esta sala no hay sillas.

En	est-a	sala	no	hay	sillas.
in	this.DEM-F.SG	room	NEG	have.IND.PRES.3SG	chair-PL

(3) この部屋には一つも椅子がない。

(3)-1. No hay ni una silla en esta sala.

No	hay	ni	un-a	silla	en	est-a	sala.
NEG	have.IND.PRES.3SG	even	ART.INDF-F.SG	chair	in	this.DEM-F.SG	room

¹ 否定辞 **no** は動詞だけではなく、名詞や形容詞と結びつくこともできる (RAE & ASALE 2009: 40.6i)。

² 動詞 **haber** は、現代スペイン語において所有の意味で用いられることはない。

(3)-2. No hay ninguna silla en esta sala.

No hay ningun-a silla en est-a sala.
 NEG have.IND.PRES.3SG no-F.SG chair in this.DEM-F.SG room

例文 (3) では名詞 (モノ) の全部否定が問題となっているが、スペイン語には2つの形式が存在する。1つは (3)-1 のように、名詞の単数形に不定冠詞を付け、構成された名詞句の直前に、否定の強調副詞 *ni* を置く方法である。もう1つは (3)-2 のように、裸名詞単数形に否定の不定形容詞 *ningún/ ninguna* を付ける方法である。2つの訳文を見れば分かるが、スペイン語では動詞の否定辞 *no* と他の否定語の共起が可能であり、否定の否定を意味することもない。またシフエンテスの内省によれば、上の (3)-1, (3)-2 と、それぞれの語順を入れ替えて生成した (3)-3, (3)-4 の間の含意の差異は、音声的強調の有無がその主たる判断材料となるため、少なくとも文字の上では同じ内容を意味していると言える。

(3)-3. En esta sala no hay ni una silla.

En est-a sala no hay ni un-a silla.
 in this.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG even ART.INDF-F.SG chair

(3)-4. En esta sala no hay ninguna silla.

En est-a sala no hay ningun-a silla.
 in this.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG no-F.SG chair

(4) その部屋には誰もいない。

(4)-1. No hay nadie en esa sala.

No hay nadie en es-a sala.
 NEG have.IND.PRES.3SG anybody in that.DEM-F.SG room

例文 (4) は人の否定に関するものであるが、スペイン語では *nadie* という専用の形式が存在する。これは、英語の *anybody/nobody* に相当する、人に関する否定代名詞であり、性・数による語形変化を持っていない。*nadie* が *anybody/nobody* という2つの語に対応するのは、動詞の前に生じた場合は英語の *no-* と同様の働きをするが、動詞の後に生起すると英語の *any-* と同様の働きを見せ、文否定要素 *no* を要求するからである (片岡 2007: 79)。なお (2), (3) と同様、前置詞句を文頭に置いても、文面では意味の差異は感じられないとシフエンテスは指摘している。

(4)-2. En esa sala no hay nadie.

En es-a sala no hay nadie.
 in that.DEM-F.SG room NEG have.IND.PRES.3SG anybody

(5) その本はこの部屋にない。

Ese libro no está en esta sala.

Es-e libro no est-á en est-a sala.
 that.DEM-M.SG book NEG be-IND.PRES.3SG in this.DEM-F.SG room

(5) は所在文の否定に関する例である。これまでと同様、否定は *no* を動詞の直前に置くことで表現するが、スペイン語の所在文には動詞 *estar* を用いる。なお、(5) については、これまでのように前置詞句 *en esta sala* を文頭に置いた場合、トピックが「その本」から「この部屋に」に移動してしまうため、「この部屋には、その本はない」といった意味になってしまう。

(6) この犬は大きくない。

(6)-1. *Este perro no es grande.*

Est-e	perro	no	es	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	big

(6) は形容詞文の否定に関する例文である。スペイン語における形容詞文は、繫辞動詞＋形容詞という語列で構成され、文を否定する際は、他の場合と同様に、動詞の直前に *no* を置く。スペイン語には *ser* と *estar* という2つの繫辞動詞が存在し、補語となる形容詞の意味によって両者を使い分ける。*ser* は、主語に関する固有の性質を表す補語を取る動詞であるのに対し、*estar* は一時的な状態を表す形容詞や所在を表す語句を伴って主語の動的性質を表す動詞である。(6) の「大きい」は主語の「犬」に関する固有の性質であるため、繫辞動詞は *ser* が使用される。例えば、(6)-2 では「冷めている (温まっていない)」というスープの一時的な状態が補語となっているため、*ser* ではなく *estar* が使用される。

(6)-2. *La sopa no está caliente.*

La	sopa	no	est-á	caliente.
ART.DEF.F.SG	soup	NEG	be-IND.PRES.3SG	hot

「そのスープは冷めている。」

(7) この犬はあまり大きくない。

(7)-1. *Este perro no es muy grande*

Est-e	perro	no	es	muy	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	very	big

(7)-2. *Este perro no es tan grande.*

Est-e	perro	no	es	tan	grande.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	so	big

例文 (7) では、形容詞文の部分否定が問題となっている。シフエンテスによれば、上記の2つの訳が適当である。(7)-1 では、形容詞の直前に強調副詞 *muy* が置かれており、「この犬はとても大きい」という言明を否定することで、形容詞の部分否定が実現されている。もう1つの訳で *muy* に代わって使用されている *tan* は、同等比較構文で使用される副詞であり、典型的には (7)-3 のように、接続詞 *como* から始まる節が比較対象を表す。

(7)-3. *Este perro no es tan grande como ese.*

Est-e	perro	no	es	tan	grande	como	es-e.
this.DEM-M.SG	dog	NEG	be.IND.PRES.3SG	so	big	as	that.PN-M.SG

「この犬はその犬ほどは大きくない。」

したがって、(7)-2 は como 節が顕在化されていない同等比較構文の否定であると考えられることができる。シフエンテスによれば、(7)-1, (7)-2 に意味上の差異は感じられないとのことだが、構文上の差異を考慮すれば、(7)-2 では、発話に際して話者が何らかの比較対象を想定している含意が存在すると言える。

(8) この犬はあの犬より大きい。

Este perro es más grande que aquel.

Est-e perro es más grande que aquel.

this.DEM-M.SG dog be.IND.PRES.3SG more big than that.PN

例文 (8) では、(7)-2, (7)-3 で議論の対象となった比較構文が問題となっている。スペイン語における比較構文は、英語の比較構文と類似した形式をとるが、形容詞・副詞に比較級・最上級の語形変化が存在しないことに注意しなければならない。英語では、音節の多い形容詞・副詞、-ly, -ful などの接尾辞を持つ副詞の比較級を表現するために、「more+原級」という形式が存在するが、スペイン語ではこれと似た「más+形容詞・副詞」という形式をとるのが通例である。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。

(9)-1. Este perro es el más grande entre todos esos perros.

Est-e perro es el más grande entre

this.DEM-M.SG dog be.IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG more big among

tod-os es-os perro-s.

all-M.PL that.DEM-M.PL dog-PL

例文 (9) では、最上級構文の形式が問われているが、これも英語の「定冠詞+most+形容詞」と同様に、スペイン語においても「定冠詞+más+形容詞」という形式をとる³。スペイン語の最上級構文について特筆すべき事項は、上記の形式を副詞の最上級に用いることができない点である。例えば、「ミゲルは5人の中で最も速く泳ぐことができる」という文を英語で表現する場合、(9)-2 のような訳が可能であるが、スペイン語では同様の構文をとることができず、(9)-3 のように疑似分裂文を用いる必要がある。

(9)-2. Miguel swims the fastest of the five.

(9)-3. Miguel es el que más rápido nada de los cinco.

Miguel es el que más rápido nada

Miguel be.IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG REL more fast swim-IND.PRES.3SG

de los cinco.

of ART.DEF.M.PL five.

‘Miguel is the one who swims the fastest of the five.’

³ スペイン語の形容詞・副詞には接尾辞 -ísimo を伴った「絶対最上級」(superlativos absolutos) と呼ばれる形式が存在するが、実際に最上級を意味するわけではなく、元の意味を強調するだけである。

(10) 今日はあの人⁴は来ない。

(10)-1. Él no viene hoy.

Él no vien-e hoy.
PN.NOM.M.3SG NEG come-IND.PRES.3SG today

(10) は自動詞文の否定に関する例文であるが、スペイン語では、これまでと同様、動詞の直前に *no* を置く。シフエンテスによれば、*hoy* 「今日」を文頭に置いても、意味の差異は感じられない (10-2)。

(10)-2. Hoy no viene él.

Hoy no vien-e él.
today NEG come-IND.PRES.3SG PN.NOM.M.3SG

(11) あ的那个人はその本を持って行かなかった。

Él no se⁵ llevó el libro.

Él no se llevó el libro.
PN.NOM.M.3SG NEG PN.REFL.3 take-IND.PST.3SG ART.DEF.M.SG book

(11) は他動詞文の否定に関する例文であるが、自動詞文と同様、動詞の直前に否定辞 *no* を置く。

(12) 全ての学生が参加しなかった。

(12)-1. No asistió ni un estudiante.

No asist-ió ni un estudiante.
NEG attend-IND.PST.3SG even ART.INDEF.M.SG student

(12)-2. No asistió ningún estudiante.

No asist-ió ningún estudiante.
NEG attend-IND.PST.3SG no.M.SG student

(12)-3. No asistió ninguno de los estudiantes.

No asist-ió ningun-o de los estudiante-s.
NEG attend-IND.PST.3SG none-M.SG of ART.DEF.M.PL student-PL

(12) では量化の全否定が問題となっている。スペイン語における量化の全否定は、(3) と同様の方法で表現される。1つは (12)-1 のように、名詞の単数形に不定冠詞を付けて構成された名詞句 *un estudiante*

⁴ 本稿では、「あの人」「その人」という語の訳出が必要となる例文が存在するが、スペイン語への訳出には、以下の理由から、一貫して *él* (主語人称代名詞 3 人称単数男性形) を用いることにする。(1) スペイン語における指示形容詞のパラダイムには、形式上、近称 *este/ esta*, 中称 *ese/ esa*, 遠称 *aquel/ aquella* の 3 つが存在するが、中称・遠称の間の差異は、一部の地域において中和が見られること (RAE & ASALE 2009: § 17.2n)。(2) シフエンテスによれば、「その人」「あの人」の直訳にあたる *esa persona, aquella persona* は軽蔑・侮蔑的な印象を与える表現であること。(3) 「あの人」の西訳に 3 人称単数の主語人称代名詞 *él/ ella (he/she)* を当てた文献が存在すること (野田 1991)。

⁵ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *llevar* 「持って行く」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「持ち去る」のような意味を作っている。

の直前に、否定の強調副詞 *ni* を置く方法である。2つは (12)-2 のように、裸名詞単数形 *estudiante* に否定の不定形容詞 *ningún* を付ける方法である。後者には (12)-3 のように裸名詞複数形をとって、英語の *none of the students* に当たる形式をとる方法も存在する。加えてこれら3つは、名詞句を構成する否定語を動詞よりも左方に置くことで、複数の否定語の共起を避ける形式も可能である。

(12)-4. *Ni un estudiante asistió.*

Ni un estudiante asistió.
 not.even ART.INDF.M.SG student attend-IND.PST.3SG

(12)-5. *Ningún estudiante asistió.*

Ningún estudiante asistió.
 no .M.SG student attend-IND.PST.3SG

(12)-6. *Ninguno de los estudiantes asistió.*

Ningun-o de los estudiante-s asistió.
 none-M.SG of ART.DEF.M.PL student-PL attend-IND.PST.3SG

(13) 全ての学生が参加したわけではない。

(13)-1. *No es que todos los estudiantes hayan asistido.*

No es que tod-os los estudiante-s hay-an
 NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL have-SBJV.PRF.3PL

asist-ido.
 attend-PP

(13)-2. *No significa que todos los estudiantes hayan asistido.*

No signific-a que tod-os los estudiante-s hay-an
 NEG mean-IND.PRES.3SG that.CONJ all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL have-SBJV.PRF.3PL

asist-ido.
 attend-PP

(12) に対して (13) は、量化の部分否定が例文のねらいとなっている。日本語における量化の部分否定は、全数量を表す語を「のではない」「わけではない」と共起させることで表現するのが通例であるが(日本語記述文法研究会 2007: 249-255)、スペイン語でも *No es que...* 「—ということではない」(13-1) や *No significa que...* 「—を意味しない」(13-2) という構文の中に *todos los estudiantes asistieron* 「すべての学生が参加した」という全称量化表現を伴った言明を埋め込む方法が存在する。これにより、日本語と同様に、全称量化を否定の焦点とすることができる。この時、埋め込み節内の動詞は、直説法ではなく接続法をとるが、シフエンテスの回答における「参加した」の時制は、直説法完了過去形 *asistieron* に対応する接続法過去形 *asistieran* ではなく、接続法現在完了形 *hayan asistido* となっている。これは、接続法過去形が未完了相であるのに加えて、その多機能性、ひいては典型的に非現実を表現する形式であるため、「参加した」のような現実には起こった完了的動作の表現にそぐわないためであると考えられる。

(13)-3. No todos los estudiantes asistieron.

No tod-os los estudiante-s asist-ieron.
NEG all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL attend-IND.PST.3PL

(13)-4. No asistieron todos los estudiantes.

No asist-ieron tod-os los estudiante-s.
NEG attend-IND.PST.3PL all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL

(13)-5. Todos los estudiantes no asistieron.

Tod-os los estudiantes no asisti-eron.
all-M.PL ART.DEF.M.PL student-PL NEG attend-IND.PST.3PL

しかしながら、(13)-1, (13)-2 は頻繁に使用される構文ではなく、部分否定は (13)-3, (13)-4, (13)-5 のように、より単純な形式で表現されるのが通例である。(13)-3 では全称量化表現を伴った名詞 *todos los estudiantes* に、(13)-4, (13)-5 では動詞「参加した」に、それぞれ否定辞 *no* を付けるという方法がとられている。なお、(13)-5 に関しては、部分否定の解釈が優勢であるものの、全部否定と解釈する母語話者も存在する (Bosque 1980: 46)。シフエンテスは (13)-5 を部分否定であると解釈している。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。

(14)-1. (Yo no lo compré, pero) no es que estuviera caro.

Yo no lo compr-é, pero no es que
PN.NOM.1SG NEG PN.ACC.M.3SG buy-IND.PST.1SG but NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ

estuv-iera car-o.
be-SBJV.PST.IPFV.3SG expensive-M.SG

(14)-2. (Yo no lo compré, pero) tampoco es que estuviera caro.

Yo no lo compr-é, pero tampoco es que
PN.NOM.1SG NEG PN.ACC.M.3SG buy-IND.PST.1SG but neither be.IND.PRES.3SG that.CONJ

estuv-iera car-o.
be-SBJV.PST.IPFV.3SG expensive-M.SG

(14) は文の否定に関する例文であるが、スペイン語では (13)-4, (13)-5 で用いた方法で表現される。主節の否定に用いる語は、(14)-1 のように *no* でもよいし、(14)-2 のように、等位接続詞 *pero* 以前の文が既に *no* を抱えていることを考慮して、*tampoco* でもよい。シフエンテスの内省によれば、後者の方がより容認度が高い表現である。

(15) 走るな!

¡No corras!
¡No corr-as!
NEG run-SBJV.PRES.2SG

(16) 大きな声を出すな！

(16)-1. ¡No alc-es la voz!

¡No alc-es la voz !
 NEG raise-SBJV.PRES.2SG ART.DEF.F.SG voice

(16)-2. ¡No hables en voz alta!

¡No habl-es en voz alt-a!
 NEG speak-SBJV.PRES2SG in voice loud-F.SG

(16)-3. ¡No te lleves el libro!

¡No te llev-es el libro!
 NEG PN.REFL.2SG take-SBJV.PRES.2SG ART.DEF.M.SG book
 「その本を持っていくな！」

(15)(16) では自動詞文・他動詞文の禁止が問われている。スペイン語における禁止、すなわち否定命令の形式に自動詞・他動詞の差異はなく、どちらも「否定辞 **no** + 動詞の接続法現在形」という形で表される。(16) については、(16)-1 のような原文の統語構造に忠実な直訳も可能ではあるが、「大きな声を出す」や「声を荒げる」のように他動詞を用いることは不自然であるため、より自然な言い回しである (16)-2 のような表現も併記している。加えて、(16)-2 には他動詞が生起しておらず、ここで問題となっている他動詞文の禁止に関する記述が十分に行えないため、他動詞文の否定が問題となっていた例文 (11) を元に作成した否定命令の例も (16)-3 として載せている。

(17) あしたは雨は降らないだろう。

(17)-1. Mañana no lloverá.

Mañana no llov-erá.
 tomorrow NEG rain-IND.FUT.3SG

(17)-2. Probablemente no llueve mañana.

Probablemente no lluev-e mañana.
 probably NEG rain-IND.PRES.3SG tomorrow

(17)-3. Es probable que mañana no llueva.

Es probable que mañana no lluev-a.
 be.IND.PRES.3SG probable that.CONJ tomorrow NEG rain-SBJV.PRES.3SG

例文 (17) で問題となっているのは、推量の否定である。シフエンテスとの検討の結果、推量のモダリティを担う語と否定辞 **no** の位置関係にしたがって、上の 3 つの形式が可能であるという結論に至った。(17)-1 は、動詞「雨が降る」を推量の用法を持つ直説法未来形に活用させ、推量のモダリティを動詞に担わせている。他方、(17)-2 では、動詞の活用形は推量の用法を持たない直説法現在であり、推量のモダリティは文頭の副詞 **probablemente** が担っている。加えて、(17)-3 のように、「明日は雨が降らない」という言明を **Es probable que...** 「—という可能性がある」の従属節に埋め込んで、言明全体に推量のモダリティが行き渡るような形式をとることも可能である。この時、従属節内の動詞は接続法をとる。

(18) あの人の聞こえないように、小さな声で話してくれ。

(18)-1. Habla en voz baja para que él no nos oiga.

Habl-a en voz baj-a para que él no nos
speak-IMP.2SG in voice low-F.SG for that.CONJ NOM.M.3SG NEG PN.ACC.1PL

oig-a.
hear-SBJV.PRES.3SG

例文 (18) では、目的節の否定が問題となっている。スペイン語における目的節には *para que* をはじめとする様々な形式が存在するが、いずれも接続法をとることが特徴であり、目的節の否定は、節内の動詞の直前に *no* を置くだけである。また、主節と目的節の動作主が同一である場合、*para* の後に動詞の不定形を置くことができるが、これを否定したい時も、同様に動詞の直前に *no* を置く。

(18)-2. Habla en voz baja para no molestar a nadie.

Habl-a en voz baj-a para no molestar a nadie.
speak-IMP.2SG in voice low-F.SG to NEG bother.INF to anybody

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

(19)-1. No es que te lo dijera porque quisiera ofenderte.

No es que te lo dij-era porque
NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-SBJV.PST.IPFV.1SG because
quis-iera ofender=te.
want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

(19)-2. No es que te lo dijera no porque quisiera ofenderte.

No es que te lo dij-era no
NEG be.IND.PRES.3SG that.CONJ PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-SBJV.PST.IPFV.1SG NEG
porque quis-iera ofender=te.
because want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

例文 (19) では否定の作用域の調節が問題となっている。日本語では「あなたを怒らせようと思ってそう言った」が否定の作用域となっているが、その焦点となっているのは理由節「あなたを怒らせようと思って」のみであり、「言った」という動作自体は否定されていない。これは「のではない」という形式によるものだが、スペイン語でも同様に、「のではない」に相当する *No es que...* を使用することで同様の形式をとることが可能である。(19)-1 では *te lo dije porque quería ofenderte* 「私はあなたを怒らせようと思って、そのように言った」という言明が従属節として埋め込まれ、日本語と同様に「あなたを怒らせようと思って」が否定の焦点となっている。またシフエンテスによれば、(19)-1 の *porque* 節の直前に、否定辞 *no* を置いた (19)-2 も (19)-1 と同様に解釈可能とのことだが、文が複雑であるためスムーズに解釈することは難しい。しかし、これら2つの文が意味的に等価であるというシフエンテスの指摘をふまえれば、(19)-2 における *porque* 節直前の *no* は虚辞として機能していると言える。

(19)-3. No te lo dije porque quisiera ofenderte.

No te lo dije porque quisiera ofender=te.
 NEG PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG because want-SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

(19)-4. Te lo dije no porque quisiera ofenderte.

Te lo dije no porque quisiera ofender=te.
 PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG NEG because want- SBJV.PST.IPFV.1SG offend.INF=PN.ACC.2SG

しかしながら、(13)と同様、(19)-1, (19)-2 は頻度の高い構文ではなく、クリティックを挟んで否定辞を主節の動詞に隣接させる方法 (19-3) や、否定の焦点となる理由節に隣接させる方法 (19-4) をとるのが一般的である。いずれの場合も、原文同様に *porque* 以下の理由節のみを否定の焦点とすることができる。したがって、否定辞 *no* の位置については、動詞「言う」の直後にしか否定辞を置くことができない日本語よりも選択肢が多いと言える。

加えて、スペイン語では従属節 (理由節) で接続法をとることにより、そこまで否定の作用域が及んでいることを明確に表現することができる。(19)-3, (19)-4 にて使用されている接続法 *quisiera* は、理由節が否定の作用域に含まれていることを示す役割を果たしている。例えば、(19)-5 のように直説法 *quería* を選んでしまうと、理由節が否定の作用域から外れてしまい、「私はあなたを怒らせたかったのですがそのように言わなかった (= 黙っていた)」という解釈になってしまう。

(19)-5. No te lo dije porque quería ofenderte.

No te lo dije porque quería ofender=te.
 NEG PN.DAT.2SG PN.ACC.N.3SG say-IND.PST.1SG because want- IND.PST.IPFV.1SG offend.INF=ACC.2SG

3. 連体修飾複文に関する回答 (例文 20-33)

本章では、連体修飾複文に関する例文 (20)-(33) の検討結果を報告する。

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ?

¿Dónde está el libro que ayer compré?
 ¿Dónde est-á el libro que ayer compr-é?
 where.INT be-IND.PRES.3SG ART.DEF.M.SG book REL yesterday buy-IND.PST.1SG

例文 (20) では、内の関係の連体修飾節が主節の目的語として機能するケースが問題となっている。高垣 (1994) によれば、日本語の連体構造は、補部 (修飾節) が主要部 (名詞) に必ず前置されるのに対して、スペイン語の連体構造は、限定詞や一部の形容詞を除いて、補部が主要部よりも後方に生起するのが特徴である。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ?

¿Quién fue el que trajo ese libro?
 ¿Quién fu-e el que traj-o es-e libro?
 who.INT be-IND.PST.3SG ART.DEF.M.SG REL bring-IND.PST.3SG that.DEM-M.SG book

例文 (21) では、内の関係の連体修飾節が主節の目的語として機能している。(20) と同様に、スペイン語では連体節が被修飾名詞に後置される。訳文では「人」を意味する普通名詞の代わりに、「定冠詞＋関係詞 que」という形式が使用されている。また、文も疑似分裂文の形をとっている。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。

(22)-1. Esta es la sala en la que trabajamos.

Est-a es la sala en la que trabaj-amos.
 this.PN-F.SG be.IND.PRES.3SG ART.DEF.F.SG room in ART.DEF.F.SG REL work-IND.PRES.1PL

(22)-2. Esta es la sala donde trabajamos.

Est-a es la sala donde trabaj-amos.
 this.PN-F.SG be.IND.PRES.3SG ART.DEF.F.SG room where.REL work-IND.PRES.1PL

(22)-3. Es en esta sala donde trabajamos.

Es en est-a sala donde trabaj-amos.
 be.IND.PRES.3SG in this.DEM-F.SG room where.REL work-IND.PRES.1PL

(22) は、場所を表す内の関係の連体修飾節に関する例文である。場所を表す連体修飾節は、スペイン語で 2 通りの方法がある。1 つは (22)-1 のように、関係詞 que の直前に所在を表す前置詞と、被修飾名詞「部屋」の数・性に合った定冠詞を置く方法である。(22) の場合、部屋を表す名詞 sala は女性名詞単数形であり、連体節は「私たちは部屋で働く」という関係になっているので、関係詞 que の直前に前置詞 en と女性単数の定冠詞 la を置いている⁶。また、原文を検討すると、格助詞「が」を従える名詞句「この部屋」は、文の焦点的情報を担っていると考えることができる。(22)-1, (22)-2 は「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です」という解釈が可能である一方、「この部屋は私たちの仕事をしている部屋です」という解釈も可能な訳文である。原文の情報構造を明確に表現するために、(22)-3 のように疑似分裂文を用いて表現することもできる。

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。

(23)-1. Ya boté esa silla de cuyas patas una estaba rota.

Ya bot-é es-a silla de cuy-as pata-s un-a
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair of whose.REL-F.PL foot-PL one-F.SG

est-aba rot-a.
 be-IND.PST.IPFV.3SG broken-F.SG

(23)-2. Ya boté esa silla que tenía una pata rota.

Ya bot-é es-a silla que ten-ía
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair REL have-IND.PST.IPFV.3SG

⁶ 単音節の前置詞 a, con, de, en, por の 5 つは、直後の定冠詞を省略して関係詞 que を直接後続させることができる (RAE & ASALE 2009: § 44.2e)。したがって (22) も、前置詞 en と関係詞 que の間にある定冠詞女性単数形 la を省略して Esta es la sala en que trabajamos. とすることもできる。

un-a pata rot-a.
 ART.INDF-F.SG foot broken-F.SG

例文 (23) では、所有者を表す内の関係の連体修飾節が問題となっている。(23)-1 は関係形容詞 *cuyo* を用いた訳文であり、*Ya boté esa silla* (その椅子はもう捨てた) という文と *Una de las patas de esa silla estaba rota*. (その椅子の脚のうち、1本は折れていた) という文から構成されている。しかし、この訳出には、「椅子が脚を (複数) 持っている」という所有者—所有物の関係と、「複数の脚のうちの1本」という全体—部分の関係が同一文中に混在しているため、被修飾名詞「椅子」が連体節を構成する句の主要部となっていない。そのため、シフエンテスによれば (23)-1 は、非文ではないが理解が困難な表現であり、(23)-2 のように、所有を表す動詞を用いて「椅子が1本の壊れた脚を持っていた」と表現し、被修飾名詞「椅子」を連体節における主語とする形式の方が平易でより好まれる。また、(23)-3 のように、関係形容詞 *cuyo* に代わって「関係詞 *que* + 所有形容詞」を用いる方法が、とりわけ口語において見られるが、これは *quesuismo* と呼ばれるくだけた形式であり、使用が推奨されていない (RAE & ASALE 2009: § 22.5n; § 44.9o)⁷。

(23)-3. *Ya boté esa silla que su pata estaba rota.*

Ya bot-é es-a silla que su pata
 already throw.away-IND.PST.1SG that.DEM-F.SG chair REL 3.POSS foot

est-aba rot-a.
 be-IND.PST.IPFV.3SG broken-F.SG

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。

Se⁸ oye un sonido de alguien llamando a la puerta.
 Se oy-e un sonido de alguien llam-ando
 SE hear-IND.PRES.3SG ART.INDF.M.SG sound of somebody call-GRND

a la puerta.
 by ART.DEF.F.SG door.

(24) は、外の関係の連体修飾節が問題となった例文であるが、シフエンテスは上記のように訳出した。この訳文では、代名詞 *alguien* 「誰か」に現在分詞 *llamando* 「呼んでいる」を後続させることで、両者の間に「誰かがドアを叩く」という主述関係が構築されている。RAE & ASALE (2009: § 27.7) によれば、名詞句と後続の現在分詞の間には、現在分詞が名詞句を形容詞的に修飾する (*gerundio adjetival*: 形容詞的な現在分詞) 解釈、もしくは上の訳のように、名詞句と現在分詞の間に主述関係を求める (*gerundio predicativo*: 述語的な現在分詞) 解釈が可能であるが、前者の形容詞的解釈は *agua hirviendo* (熱湯) のような少数の固定表現にのみ可能な解釈であるのに加え、後者の述語的解釈も、名詞句が写真や絵画などに関するもの、あるいは聴覚をはじめとする知覚に関するものである場合にのみ可能であり (RAE & ASALE 2009)、いずれも生産性の高い形式ではない。

⁷ シフエンテスは (23)-3 を文法上可能だが、自然な表現ではないと判断している。

⁸ この *se* は再帰代名詞ではなく非人称文や再帰受身文の標識 (*indicador de oraciones impersonales y de pasiva refleja*) であり、*oye* 以下の動詞句を受動態にする機能を担っている (RAE & ASALE 2005 s.v. *se*)。

シフエンテスが (24) の訳出に生産性の低い現在分詞を使用した背景には、名詞句 *un sonido* (ある音) の定性が関与している可能性がある。スペイン語では「事実」「引用」「感覚」などを表す名詞は、外の関係の連体修飾に対応する「定冠詞+名詞+前置詞 *de*+接続詞 *que*+従属節」という構文をとることができる (三好 2016: 114-117) が、ここで名詞に先行する限定詞は定冠詞であるのが通例であり、筆者の確認する限り、不定冠詞が生起する例は非常に少数である。例文 (24) の検討中、シフエンテスは「発話者が例文 (24) を発する場面では音の正体に関する十分な情報・知識が存在しないため、名詞 *sonido* に定冠詞 *el* を付けるのは不自然である」と指摘しており、このコメントから推察すれば、シフエンテスは、「音」の正体の不確かさを理由に名詞 *sonido* に不定冠詞 *un* を付け、形成された不定名詞句 *un sonido* との共起を容認する構文を模索した結果、*un sonido de que* という連体構造を避けて、現在分詞の述語的使用を選択したと考えられる⁹。シフエンテスの内省が示唆する「定冠詞+被修飾名詞+*de que*+従属節」の使用可能性と被修飾名詞の定性の関係については、更なる精査が必要であるが、本稿では、スペイン語における外の関係の連体修飾節には、被修飾名詞の語彙や定性に関する制限があり、日本語ほど生産性・自由度の高い構文ではないことを指摘するとどめる。

(25) あの人が結婚したという噂は本当 (か) ?

¿Es cierto el rumor de que él se casó?

¿Es ciert-o el rumor de que él
be.IND.PRES.3SG true-M.SG ART.DEF.M.SG rumor of that.CONJ PN.NOM.M.3SG

se cas-ó?
PN.REFL.3 marry-IND.PST.3SG

(25) も外の関係の連体修飾に関する例文である。前述の三好 (2016) に従えば、「噂」は「～という」を介して連体節 (内容節) を伴う、引用に関係する名詞であるため、上のように訳出することができる。こちらは (24) と異なって、問題なく「定冠詞+被修飾名詞+*de que*+従属節」という形式を使用できる。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。

Cuando él llegó, yo estaba comiendo.

Cuando él lleg-ó, yo est-aba com-iendo.
when.CONJ PN.NOM.M.3SG arrive-IND.PST.3SG PN.NOM.1SG be-IND.PST.IPFV.3SG eat-GRND

⁹ 不定名詞句 *un sonido* が *un sonido de que...* という連体構造を許容しないことに加え、聴覚に関する名詞自体が連体構造をとりにくいことも、シフエンテが訳出に現在分詞を使用した動機のひとつであると考えられる。Davies (2016-) のスペイン語コーパス *Corpus del Español* を使用して、三好 (2016: 114-117) の挙げる 3 種類の名詞がとる連体構造の生起頻度を調査すると、*el hecho de que* 「～という事実」の生起頻度 267445、*la noticia de que* 「～という報告」の生起頻度 22237 に対して、*el sonido de que* が生起する用例数はわずかに 14 であり、「事実」「引用」「感覚」という 3 種類の名詞の中でも、「感覚 (聴覚)」を表す名詞の連体構造は圧倒的に生産性が低いことが分かる。三好 (2016) 自身も *el rumor de que anda alguien* 「誰かが歩いている音」という連体構造の例を挙げているが、*rumor* は通例「噂」を意味する名詞であり、三好の解釈に反して「誰かが歩いているという噂」の意で表現が解釈・容認されている可能性もある。したがって、名詞 *sonido* が定冠詞 *el* を伴ったとしても、*el sonido de que...* が他の 2 タイプと同様に生産的な連体構造であるとは言えない可能性がある点も報告する。

(26) では時間節の表現が問題となっている。スペイン語の時間節は一般に *cuando* が導く節により表現される。この *cuando* は、高垣 (2007) をはじめとする西和辞典は接続詞と記述しているが、王立言語アカデミーは、先行詞が省略された関係副詞として解釈している (RAE & ASALE 2009: § 22.9)。なお、スペイン語における過去時制は完了過去と未完了過去の2つから成るが、「食べていた」のような、過去のある時点における未完了の動作は未完了過去で表される。

(27) 私はその人が待っているところに行った。

(27)-1. (Yo)¹⁰ fui al lugar donde él me estaba esperando.

Yo	fu-i	al	lugar	donde	él	me
PN.NOM.1SG	go-IND.PST.1SG	to.ART.DEF.M.SG	place	where.REL	PN.NOM.M.3SG	PN.ACC.1SG
	est-aba		esper-ando.			
	be-IND.IPFV.3SG		wait-GRND			

(27) は場所節に関する例文である。スペイン語における場所節には *donde* を使用する。王立言語アカデミーは、(26) の *cuando* と同様、*donde* も関係副詞であるとしているが、*donde* は *cuando* よりも先行詞を明示する頻度が高く (RAE & ASALE 2009: § 22.8c; § 22.9c)、(27)-1 では名詞 *lugar* が先行詞として使用されている。また、*donde* は (27)-2 のように、先行詞を中に含んでしまうことが可能である (高垣 2007 s.v. *donde*)。

(27)-2. No tenemos donde guardarlo.

No	ten-emos	donde	guardar=lo.
NEG	have-IND.PRES.1PL	where.REL	put.away.INF=PN.ACC.N.3SG

「私たちにはそれをしまっておく場所がない。」

(28) 私はその人が走っていったのを見た。

(28)-1. (Yo) lo vi irse¹¹ corriendo.

Yo	lo	v-i	ir=se	corr-iendo.
PN.NOM.1SG	PN.ACC.M.3SG	see-IND.PST.1SG	go.INF=PN.REFL.3	run-GRND

(28)-2. (Yo) vi que él se fue corriendo.

Yo	v-i	que	él	se	fu-e	corr-iendo.
PN.NOM.1SG	see-IND.PST.1SG	that.CONJ	PN.NOM.M.3SG	PN.REFL.3	go-IND.PST.3SG	run-GRND

(28) は視覚の補文節に関する例文である。スペイン語における知覚の補文節は、(28)-1 のように、知覚された事象の動作主を知覚動詞の直接目的語、動作内容を不定詞で表す方法と、(28)-2 のように、接続詞 *que* を用いた埋め込み節を形成し、*que* 節全体を知覚動詞の直接目的語とする方法のいずれかで表

¹⁰ 以降、“(Yo)” という表記があるが、これは「主語人称代名詞 1 人称単数 *yo* を省略しても構わない」という意味である。スペイン語は *pro-drop* 言語であるため、主語の明示が義務的ではない。本稿では、シフエンテスが「問題なく省略できる」と判断した *yo* に関して、この表記を用いている。

¹¹ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *ir* 「行く」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「立ち去る」のような意味を作っている。

現可能である。両者の意味は、補文内容に対する知覚者の証拠性 (直接経験性) の差異で説明できるとされる。Hugo Rojas (2011: 148-149) は以下の 2 例を対照させながら、(28)-3 が直接経験のみを、(28)-4 が直接経験あるいは間接経験を含意する形式であると述べている。

(28)-3. Oí ganar a los jóvenes.

O-í ganar a los jóven-es.
 hear-IND.PST.1SG win-INF to ART.DEF.M.PL young-PL
 「私は若者たちが勝つのを実際に耳にした。」

(28)-4. Oí que los jóvenes ganaron.

O-í que los jóven-es gan-aron.
 hear-IND.PST.1SG that.conj ART.DEF.M.PL young-PL win-IND.PST.3PL
 「私は若者たちが勝つのを実際に耳にした。 / 私は若者たちの勝利を噂で聞いた。」

この記述を踏まえれば、(28)-1 は「発話者が自分自身でその人が走り去ったのを目撃した」という直接経験を表現しているのに対し、(28)-2 は直接経験に加えて「その人が走り去ったことを物語る様子・痕跡などを目にした」という間接経験性も含意することができると言える。しかし、シフエンテスの内省によれば、少なくとも (28)-1, (28)-2 の間に、証拠性に起因する意味上の差異は感じられない。また、これら 2 つの訳文に加えて、主にスペインのスペイン語において、男性単数の直接目的格代名詞 *lo* の代わりに間接目的格代名詞 3 人称単数形 *le* を使用する現象 *leísmo* が見られる点も報告する (28-5)。

(28)-5. (Yo) le vi irse corriendo.

Yo le v-i ir=se corr-iendo.
 PN.NOM.1SG PN.DAT.3SG see-IND.PST.1SG go-INF= PN.REFL.3 run-GRND

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。

(29)-1. Anoche los oí hablando.

Anoche lo-s o-í habl-ando .
 last.night PN.ACC.M.3-PL hear-IND.PST.1SG talk-GRND

(29)-2. Anoche oí que ellos estaban hablando.

Anoche o-í que ellos est-aban habl-ando.
 last.night hear-IND.PST.1SG that.CONJ PN.NOM.M.3PL be-IND.PST.IPFV.3PL talk-GRND

(29)-3. Anoche les oí hablando.

Anoche le-s o-í habl-ando .
 last.night PN.DAT.3-PL hear-IND.PST.1SG talk-GRND

(29) は聴覚の補文節に関する例文であるが、訳出の方法は (28) と同様に 3 通り存在する。(29)-1 が「彼ら」を「聞いた」の直接目的語、「しゃべっている」を補語とする方法、(29)-2 が「彼らがしゃべっていた」を接続詞 *que* を用いて埋め込み節とし、「聞いた」の直接目的語とする方法であり、(29)-3 が、(29)-1 の「彼ら」を間接目的格代名詞 3 人称複数形 *les* で表現する *leísmo* が現れている訳文である。

またシフエンテスによれば、(28) と同様、(29)-1, (29)-3 と (29)-2 の間に、証拠性による差異は感じられない。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。

Sé que ayer él vino aquí.

Sé que ayer él vino aquí.
 know.IND.PRES.1SG that.CONJ yesterday PN.NOM.M.3SG come-IND.PST.3SG here

(30) は知識に関する補文節が問題となっている例文である。ここでは、(28) (29) のように不定詞や現在分詞を用いた補文節を使用することはできず、知識の内容を埋め込み節とする方法が存在するのみである。

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

(31)-1. Ayer él me dijo que en ese mismo día ya había estado aquí.

Ayer él me dijo que en es-e mismo día
 yesterday PN.NOM.M.3SG PN.DAT.1SG say-IND.PST.3SG that.CONJ in that.DEM-M.SG same day

 ya hab-ía est-ado aquí.
 already have-IND.PST.IPFV.3SG be-PP here

(31)-2. Ayer él me dijo: “Hoy ya estuve aquí”.

Ayer él me dijo: “Hoy ya estuv-e aquí”.
 yesterday PN.NOM.M.3SG PN.DAT.1SG say-IND.PST.3SG today already be-IND.PST.1SG here

例文 (31) では、話法による補文節の書き分けが問題となっている。(31)-1 は間接話法であり、「彼」の発話内容が *que* 以下の節に埋め込まれている。主節の動詞「言った」が過去の動作であるため、従属節に時制の一致を適用させて、「ここに来た」に相当する動詞句 *había estado aquí* が過去完了形となっている。しかし、これだけでは「彼が言った」のと「彼が既に訪れていた」のが違う日に起こったことであると解釈される可能性があるため、両者が同じ「昨日」の出来事であることを明確にする必要がある。ここでは、従属節内にある *en ese mismo día* (まさにその日に) がその役割を担っている¹²。

一方の (31)-2 は直接話法による表現である。こちらは、主節と従属節の時制を一致させる必要がないので、原文の通り訳出している。

¹² 本来 *ese mismo día* / *en el mismo día* は交替可能で前置詞 *en* の使用は任意である (RAE & ASALE 2009: § 39.3t) が、シフエンテスの内省によれば、*ese mismo día* だけでは「彼の発言」と「発話の場所への彼の発話時以前最後の来訪」の両方が、同じ昨日に起こった出来事であることが保証できておらず、*en* が両事象の同日性を保証している。したがって、(31)-2 における *en* は省略可能な語ではない。

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。

(Yo) comí la manzana que había en ese plato.

Yo	com-í	la	manzana	que	hab-ia	en
PN.NOM.1SG	eat-IND.PST.1SG	ART.DEF.F.SG	apple	REL	have-IND.PST.IPFV.3SG	in
	es-e	plato.				
	that.DEM-M.SG	dish				

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。

(Yo) atrapé el gato que se¹³ entró en casa.

Yo	atrap-é	el	gato	que	se	entr-ó
PN.NOM.1SG	catch-IND.PST.1SG	ART.DEF.M.SG	cat	REL	PN.REFL.3	enter-IND.PST.3SG
	a	la	casa.			
	to	ART.DEF.F.SG	house			

(32) (33) は主要部内在型関係節が問題となっている例文である。(32) は「私は (あの) 皿の上にあったリンゴを食べた」という文における主節の目的語「リンゴ」が従属節の中に入り込み、主語として機能している。同様に、(33) も「私は家に入ってきたネコを捕まえた」という文における主節の目的語で「ネコ」が主語として従属節に入り込んでいる。スペイン語には、このような構文の多様性は存在せず、いずれの場合も「私は (あの) 皿の上にあったリンゴを食べた」「私は家に入ってきたネコを捕まえた」と訳出するほか、手だてが存在しない。

4. おわりに

本稿では「否定、形容詞、連体修飾複文」に関するスペイン語のデータ提供を行った。否定に関する検討の結果、スペイン語における否定は単純であり、文のタイプによらず動詞の直前に否定辞 *no* を置くことで表現できることが明らかになったほか、その作用域は接続法などの日本語には存在しない形式を使用することによって、より明確に表示可能であることを報告した。形容詞文に関する検討では、スペイン語における形容詞文が、形容詞の意味によって、2つの繫辞動詞 *ser/estar* を使い分ける点や、形容詞が比較に関する語形変化を基本的に持たない点を報告した。連体修飾複文に関する検討では、外の関係の連体修飾の生産性の低さや、主要部内在型関係節の不在から、スペイン語の連体構造の使用が日本語よりも制限的であることを報告した。

¹³ *se* は再帰代名詞で、ここでは動詞 *entrar* 「入る」にアスペクト的なニュアンスを付け加えて「いきなり入る」のような意味を作っている。

略号一覧

-	inflexion	FUT	future	PN	pronoun
=	clitic boundary	GRND	gerund	PP	past participle
1	first person	IMP	imperative	POSS	possessive
2	second person	IND	indicative	PRES	present
3	third person	INDF	indefinite	PRF	perfect
ACC	accusative	INF	infinitive	PST	past
ART	article	INT	interrogative	REFL	reflexive
CONJ	conjugation	IPFV	imperfective	REL	relative
DAT	dative	M	masculine	SBJV	subjunctive
DEF	definite	N	neuter	SE	se
DEM	demonstrative	NEG	negative	SG	singular
F	feminine	PL	plural		

参考文献

欧文

Bosque, Ignacio. 1980. *Sobre la negación*. Catedra.

Davies, Mark. 2016-. *Corpus del Español: Two billion words, 21 countries*.

<http://www.corpusdelespanol.org/web-dial/>. (Web / Dialects) (最終閲覧日 2019年6月14日)

Hugo Rojas, Evelyn. 2011. “Las formas de segunda persona singular como estrategias evidenciales”, *Revista de Lingüística Teórica y Aplicada*. Universidad de Concepción. 49 (1), pp. 143-167.

RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2005. *Diccionario panhispánico de dudas*. Santillana.

RAE & ASALE (Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española). 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa Libros.

Zagona, Karen. 2002. *The Syntax of Spanish*, Cambridge University Press.

和文

片岡喜代子. 2007. 「Neg を c- 統御する不定語+モ」『言語研究』, 日本言語学会, 131, pp. 77-113.

高垣敏博. 1994. 「日本語とスペイン語の名詞修飾」『日本語とスペイン語 (1)』国立国語研究所編, くろしお出版, pp. 1-28.

高垣敏博 (編). 2007. 『西和中辞典』(第2版), 小学館.

日本語記述文法研究会 (編). 2007. 『現代日本語文法 3』, くろしお出版.

野田尚史. 1991. 『はじめての人のための日本語文法』, くろしお出版.

三好準之助. 2016. 『日本語と比べるスペイン語文法』, 白水社.

執筆者連絡先: kitada.toshitaka.l0@tufs.ac.jp (喜多田), kmenesesc@unal.edu.co (シフエンテス)

原稿受理: 2019年5月6日